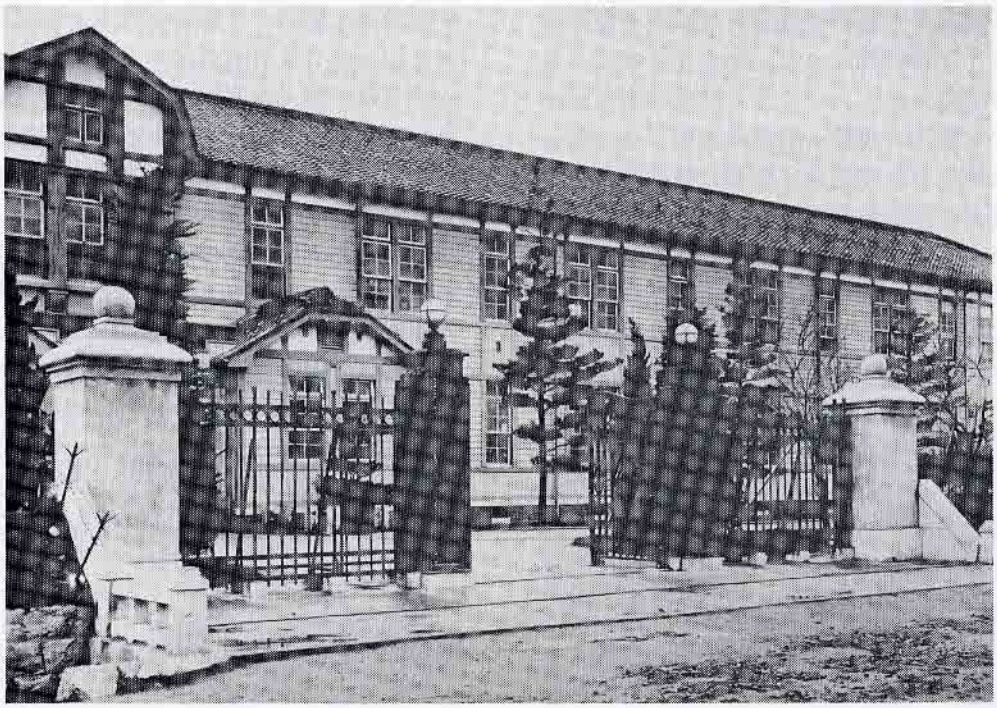
ISSN 0919-4339

九州大学
大学史料室ニュース

第4号　1994.9.20.

目　次

学生紛争と旧制福高資料 …… 2
史料紹介（4）…… 4
沿革史紹介（3）…… 6
九州大学大学史料室印刷物
収集・整理・保存要項 …… 6
受贈図書一覧 …… 7
大学史料室日誌抄録 …… 8



旧制福岡高等学校正門及び本館

旧制福岡高等学校は、1921年（大正10）11月、高等教育機関増設計画にもとづき、当時の福岡市大字鳥飼字大坪に創立された（現六本松地区）。九州では五高、七高、佐高につぐ、4番目の高等学校であった。大学進学を目指す福岡県内の中学出身者は、それまで他県の高等学校に進学していたが、以後必ずしも地元を離れる必要はなくなった。同校は戦後の学制改革で、新制九州大学に包括されて九州大学福岡高等学校となり（1949年5月）、1950年（昭和25）3月には廃校となった。上の写真は福岡高等学校本館（教室及び事務室）として建築されたもので、木造2階建、建坪385坪。九州大学第一分校、同教養部の本館としても利用されたが、1967年（昭和42）7月には取り壊され、跡地は教養部新本館及び前庭となった。

学生紛争と旧制福高資料

毛　利　淨　賢

この度九州大学史料室の設置により、旧制福岡高校の資料が旧教養部から移管、保存されることとなり、旧制高校教育の伝統ある歴史が、これら資料によって、後世に語りつがれるに至ったことに対し、青陵会（旧制福高同窓会）会長に代り深く感謝の意を表したい。

昭和22年、長い歴史を持つ旧制高校制度の廃止が決定された。当時占領軍教育制度改革委員の重要ポストに、この旧制高校の廃止を強力に主張したロナルド・アンダーソンなる人がいた。この人は私の福高在学時代の英語教師であった。私は昭和20年母校のドイツ語教師として赴任したが、ある日突然制服制帽の米軍将校がジープで校門をくぐった。私はその時、恩師秋山六郎兵衛先生の得意のジョークに一杯食わされた思い出がある。先生は私に向って「進駐軍が調査にきてるよ」と意味あり気な笑を浮べていわれた。私事になるが、私は赴任の直前まで陸軍の幹部を養成する陸軍幼年学校でドイツ語教師だった。まさか？と思ったものの一瞬ひやっとしたが、それはあに図らんやアンダーソン先生の母校への表敬訪問であった。同じ頃アンダーソン先生は、京都に蟄居中の福高時代の同僚ドイツ人教師ハンス・エッカルト先生を見舞われた。勝者対敗者のこの対面の場にいたエッカルト先生のメードさんによれば、一応の儀礼的挨拶を交わしたエッカルト先生は無言のまま相手を睨みつけておられたそうである。

ところでドイツは占領軍の干渉をはねつけ、教育制度を改めず、旧制高校制度の伝統を守った。日本の旧制高校はドイツの高校（ギュムナーズィウム）に由来する。旧称では八年制高等学校、新制では九年制高等学校と呼び、年齢的にはその最後の３年間の上級学年が旧制高校にあたる。ギュムナーズィウムの特徴は小学校修了者より優秀な生徒を選抜し、ギリシャ・ラテンの古典語の学習を主軸に、人間形成すなわち教養（ビルドウング）を身につけさせることにある。私は昭和５年福高に入学したが、その授業のスパルタ式教育に驚いた。最初は兵営にはいった初年兵の様な気がして、こんな学校にはいるんじゃなかったと後悔の涙さえ流した。特に第一外語のドイツ語の授業は峻厳どころか地獄の責苦だった。だが２学期も半ば頃になると大きな自分の変化に気づいた。威圧感が消えた。学校生活が夢にみちた楽しみと化した。自らの力で発見した楽しさである。苦難は人を造るという。もし旧制高校が成功したというならば、その成功の一つはここにあったのではないかと今も思っている。かつてある女流作家が東京で催された寮歌祭を評して、「よき時代への無意味なノスタルジアだ」という意味のことを書いたが、論理が逆ではなかろうか。楽しかったが故によき時代であったのであって、時代は決して彼女のいう意味のよき時代ではなかった。

旧制高校はギュムナーズィウムと同様原則的に全寮制度であった。又各クラスは第一外語によって編成され、寮生活と共に心身の共同生活の場であった。裸の生活であった。各人の弱点は見事に見抜かれる。優劣感は作動しないのである。又ギュムナーズィウムの如く旧制高校を卒業すれば旧帝大及びその他の国立大学への進学の資格が与えられた。ドイツのアビトゥールに当る。但し一部の学部では志願者が定員を上回り、入学試験が行われたが、それは日本の国立大学の受入制度がドイツのそれと異った為に起った矛盾であった。又原則的には高校にも大学にも格差意識はなかった。私の親友だった三菱重工社長末永聡一郎氏（故人）は戦後の大学の格差意識への反感から、「私は東京帝大の出身で東京大学出身ではありません」といって、ある東大総長の発言に反発したことがある。ともあれ、ドイツの旧制高校は存続し、日本の旧制高校は歴史的存在となった。従って、その記録はまさに資料にあらずして史料であるかもしれない。しかし人間形成は大学の基本である以上、最近大学改組のパターンとなっている教養課程廃止には、それを補って余りある周到な対策が用意されていなくてはなるまい。

さて、いまこの旧福高の資料について語るとき、戦後の学生紛争を避けて通ることはできない。そして学生紛争を語るとき、これに反応した旧制高校同窓生のエネルギーを見過すこともできない。

私は期せずして母校の教壇に立った事情にもよるが、やがて卒業生ゼロという母校の将来を思い、又次第に激化する学生紛争によって、資料が損傷散逸することを恐れた。昭和35年安保条約強行採決によって、全学連の集団が首相官邸に突入する流血の惨事が起こった。これに続いて国会突入と拡大し世情騒然たるとき、これに反応するが如く、昭和36年東京で第一回の全国寮歌祭が開催され

た。その時の主催者たちの挨拶は異口同音に、日本の戦後の大学教育のあり方に対し、不安と疑惑、国の将来に対する憂慮を叫んでいる。上記学生行動は教養部キャンパスにも波及し、相続くストライキに加え、無秩序なビラによって、旧木造校舎は無惨な姿に荒廃した。この有様をみるにみかねた青陵会の会長以下幹事の人々は、創立四十周年(昭和37年)の記念事業として五百万円の醵金により、学園の美化の為、記念像と噴水の建設に着手した。この頃一般の民間人の間にも、大学のあり方に疑問と不安を抱く風潮が強まり、旧制高校における教育が再認識され始めた。昭和38年ＯＢによる対佐賀高校野球戦が復活し、以後例年の行事となり、昭和42年福岡にも九州寮歌祭が開催され、今日まで毎年の行事となっている。しかし昭和43年エンタープライズの佐世保寄港に反対する全学連は教養部学生会館を占拠し、同年６月学生紛争の為延期されていた記念像と噴水の除幕式の直後、米軍機が九大に激突し、以後九大は収拾のつかぬ混乱に陥った。この頃は既に旧木造校舎の鉄筋への改築が完了していて、福高資料は事務保管の部分以外はその一室にかくまわれることとなった。しかし学生紛争は益々激しく、昭和44年３月本館封鎖という最悪の事態を迎えた。そして10月14日全九大が機動隊により封鎖を解除された。

資料はこれによって徹底的損傷を受けた。学生の破壊によるものに加え、事務室保管の書類は放水により特に被害が大きかった。旧校長室の備品中修復可能のものは青陵会の負担で修復され、現在もその役割を果している。その後昭和55年図書館の改築に際し、当時の図書館長中村正夫教授の配慮により、青陵会の為に一室が確保され、資料は事務室保管の部分と共に、未整理のままながらこの室に集められた。青陵会は建設費の一部として若干の寄付金を当局に贈って感謝の意を表した。

ところがその後九大移転が決定したのに際し、旧教養部安東毅教授から、資料をどうするかという問い合わせがあり、同時に九大史料室の設置を知らせて貰ったのである。折りも折、旧制松本高校跡に「旧制高校記念館」が完成し、平成５年７月の開館を前に、資料及び記念物の供与及び貸与に協力を求められた。説明によると、松本市が５億、松本高校同窓会が１億の巨費を投じて建設したものであり、旧制高校のメッカともいえよう。しかし旧制高校は歴史的に地元との密着が強く、わが青陵会も資料の地元保存を選んだ。又同窓の和田総長も九大史料室に保存することを希望され、極めてスムーズにこの問題は最終的に解決された。

私は移転が未決定の頃、最も損傷のひどい「学生身上調査綴」だけでも整理しようと思い、大学側の許可手続きを経て１ヶ月予定で着手した。これは学生の在学中の成績、行動、人物評価、健康、父兄の学校宛書簡よりなり、父兄の書簡は封筒に入れたままで貼付されている。私の場合など学費に関する父の書簡が数通あり、学校訪問の名刺まで貼付してある。大部分の調査票はバラバラになっている。アトランダムに１枚を取る。成績は首席を占め、組長でありながら、１科目欠点のため「落」の印がおされている。また学資の継続の見込立たず、卒業を目前に「退学」とある。また２ヶ年連続の落第の為「放校」とある。かつてのエリート教育スパルタ教育のあまりの苛酷さに、すました写真の顔が泣き顔に変わるようにみえる。

「生徒課日報綴」というのが調査綴の中にまぎれこんでいた。そしてこれは僅かに昭和６年度と11年度の分しかない。これは学校の内外における学生の行動の日記であるが、主体は共産主義又は社会主義政治行動である。昭和６年といえば丁度われわれが２学年の時である。この年、満州事変が勃発し、軍国主義が胎動し始めた。この日報を賑わせているのは作家檀一雄及びそのグループである。檀は共産党のシンパと目され、岩口生徒主事に度々呼び出されるが、対話記録からみると、因循姑息なところが全くなく、純真そのものである。強力なオルグと覚しき先輩の某氏がさかんにオルグに勧誘するが、これを阻止せんとする岩口生徒主事と、共産党と一線を画することによって、岩口主事の追及をかわす檀のやりとりは面白い。特高や憲兵が秘かに学校に出入りしていたらしく「○○氏来校」として名刺まで貼ってある。複雑な笑を誘うのは校内文具店のおやじ、校内靴屋の爺さんが学生の不穏ビラや秘密集会の情報提供を手伝っていた記事である。旧制高校特有と思われる成績簿がある。これは各学期各学年の成績席次の記録の他に、念入りにも、在学期間全期の平均成績と席次を記録している。私は機密書類の関係で、ただ一度かい間みただけだが、今回の移管に伴う調査により、これは完全に保存されていることが分かった。他に「同窓会報」「福岡高校一覧」「校友会雑誌」「芳名帖」等があるが、芳名帖は旧制福高を訪れた著名人たちの署名である。私はその１冊を見ただけであるが、新渡戸稲造先生や中野正剛氏の署名を見た記憶がある。

最後に、学生紛争によって生じた欠如資料が、今後同窓生諸兄によって補充され、又新しい資料が追加されることによって、旧制高校の人間形成の実態が後世に語りつがれんことを切望する次第である。

（元九州大学教授）

史料紹介（4）

九州大学の概要

九州大学大学史料室では、公文書、私文書、九大自体の活動を紹介するパンフレット、報告書等のほか、文部省や九大以外の大学が刊行する各種の印刷物を所蔵している。このうち国立大学を中心にした他大学関係の印刷物は、本部事務局の協力により最近受け入れを開始したものであるが、それらを通覧してみると、全国の大学において実に多様な—たとえば『概要』『案内』『時報』『学報』『要覧』といった、いわゆる広報に関する印刷物が数多く刊行されている様子をうかがうことができる。

これらのうち、ほとんどの国立大学において刊行されているものが、『○○大学概要』という名称の印刷物である。最近ではＡ４版の大きさに、カラー写真や多色刷の表、グラフ等をふんだんに取り入れ、自校の活動や概況を紹介すると同時に、学外の者がその大学を知ろうとするときには、先ず第一に参照すべき資料の一つとなっている。九州大学でもこの種の広報誌は『九州大学の概要』として毎年定期的に刊行されてきたが、今回はこの『概要』についての紹介をしてみたい。

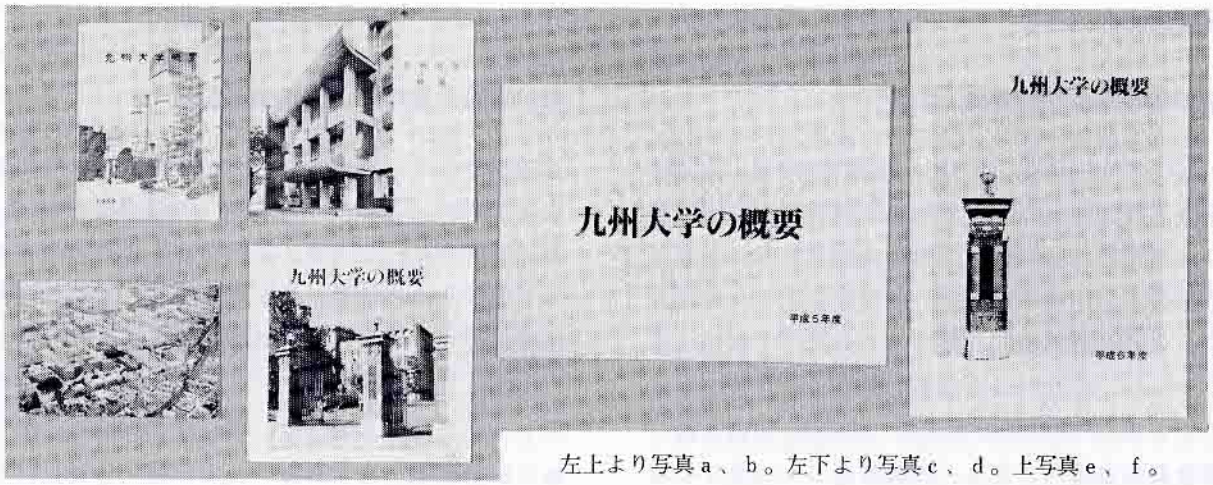
九州大学の『概要』は、1958年（昭和33）に創刊された『九州大学概要』が最初のものである（写真ａ）。版型は四六判四切の表裏に印刷をしたリーフレット形式（折り畳み式）で、四折Ｂ６仕上げ（活版）。印刷所は九州大学印刷所であった。掲載事項は、沿革表、職員数、学生数、卒業者数、学科名および講座数、学位授与数、蔵書数、病床数、学部、研究所および附属施設、旧校および旧施設、九州大学土地建物坪数、福岡市内位置図、本部地区医学部及び病院地区の航空写真からなり、表紙には銅版刷りの工学部本館建物の写真が利用されている。

以後この『概要』は、表紙にオフセットカラー写真が使われた1961（昭和36）、1962（昭和37）、1963年（昭和38）度分以外は、引続き九州大学印刷所で印刷が行われ、1964年（昭和39）度からは本学印刷所でも表紙のカラー印刷（平版）が行われるようになった。一方内容については、創刊号の航空写真が現在でも利用されている学内地図に変更されたほかは（1959年度）、学生数に留学生の数が加わった（1962年度）ぐらいで大きな変更もなく、1968年（昭和43）度まで刊行が続けられた。

ところで、この『概要』が刊行されるようになった理由ははっきりしないが、『概要』が創刊される前年の1957年（昭和32）11月に、「九州大学概況」と呼ばれるガリ版刷りの冊子が出されており、その内容が上の『概要』と重複するものであったことからすれば、「概況」から『概要』へという連続性を想定することも可能であろう。またこの創刊には、戦中戦後にかけて中断していた『九州大学一覧』の復刊（1955年３月）にみられるような印刷事情の好転や、「九州大学事務組織規則」「事務局及び学生部事務分掌規則」（1959年４月）の制定に象徴されるような大学事務組織の改編、整備といった状況の変化も、なんらかの影響を与えていたものと思われる。なお、現在『概要』は概算要求の付属資料として利用されているが、このような予算編成等との関係が、創刊当初から存在していたかどうかは、明確な史料が残されておらず確認することはできない。

しかしいずれにしろ、『概要』が上に述べたような状況のもとで、九大の現況を学内外に周知、報告するために作成されたものであること、それが途中で予算関係の付属資料となり、あるいは学内記念行事、たとえば創立記念式典の配布物として利用されるようになったものであることは、まず間違いないところであろう。この記念式典と『概要』との関係をいま少し詳しくいうと、本学創立五十周年にあたる1961年（昭和36）には、「創立50周年記念」という文字と本学の紋章の入った特別仕様の『概要』が出され、また翌62年の『概要』は、創立記念日に「開学記念行事表」「開学記念タオル」「第15回九大祭案内」等の記念品と同じく、式典参列者に配布された。

その後この形式の『概要』は、大学紛争中の1969年（昭和44）にＢ５版変型（18cm×20cm）、頁数32頁の冊子（パンフレット）となり、形態が大きく変化した（写真ｂ）。その内容は、目次、沿革（年表）、役職員、組織図が新たに加わり、学部、大学院、学生定員および在籍学生数、入学者の状況、附属図書館蔵書数、診療科名および病床数等の項目が詳細になるなど、ほぼ現在の『概要』に通じる改編となっている。写真も表紙を含めて合計11枚が所収されているが、冊子型となって取扱い



左上より写真ａ、ｂ。左下より写真ｃ、ｄ。上写真ｅ、ｆ。

が簡便になり、リーフレットに特有の折り目破損も見られなくなった。紛争期に現れたこの形式の『概要』は、内容として決算額の項目が増え（1971年度）、総頁数が僅かに増加しただけで基本的な構成には変化がなく、1975年（昭和50）度まで刊行が続けられた。

しかし、翌年の1976年（昭和51）には２度目の改版がなされ、タイトルが『九州大学概要』から『九州大学の概要』に改題されると同時に、大きさもＢ５版変型からＢ６版（全51頁）に縮小された(写真ｃ)。また印刷所が九州大学印刷所から福岡市内の松隈印刷株式会社に変わり、1980年（昭和55）度からは、裏表紙に発行日と「編集発行　九州大学庶務部庶務課」といった奥付も記載されるようになった（1989年度まで)。ちなみに判明する分の発行月を記せば、1985年（昭和60）～89年（平成元）が７月、81年（昭和56)、82年（昭和57）が８月、80年（昭和55)、83年（昭和58）が９月、84年（昭和59）が10月の、発行である。

1980年（昭和55）度から掲載写真がカラーとなり、1978年（昭和53）度～82年（昭和57）度の表紙に福岡市在住の画家寺田健一郎氏の絵やデザインが利用されているのも、この時期の『概要』の特徴であろう。内容的には1978年度に折込みの沿革略図（チャート）が加わったほか、外国人留学生数の表が国別、部局別になりその量が増えたこと（1984年度)、1989年（平成元）度に交流協定締結大学が掲載されるようになったことが新たな変化であり、留学生教育、国際交流に新段階を迎えつつあった、80年代の本学の状況がよく現れている。

以後このＢ６版の『概要』は、1989年（平成元）度まで14年間にわたって刊行されたが、1990年度には３度目の改編が行われ、その結果、Ａ４変型（19cm×20cm)、全56頁、多色刷りの大変見やすい『概要』となった（写真ｄ)。内容的には歴代学長、科学研究費補助金、受託研究員等の研究員が加わり、さらに1992年（平成４）度には、学内共同教育研究施設、奨学寄付金、受託研究費に関するデータも所載されるようになる。裏表紙に学生バッジ用に考案された松葉の紋章が付けられ始めたのも、今回の改編からであった。90年代の初めは、『概要』がよりビジュアルになるとともに、受託研究費、研究員、奨学寄付金等の項目の追加に見られるように、大学とそれを取り巻く環境も大きく変わり始めていた。

ついで1993年（平成５)、『概要』は行政文書のＡ版化に伴い、Ａ４版・横規格に４度目の改編を行ったが（全49頁、写真ｅ)、卒業者の卒業後の状況が追加され、逆に沿革の項目が無くなったぐらいで、基本的な所載項目（目次）自体にはさほどの違いは見られなかった。ただし学部学科及び講座、大学院研究科及び専攻、附置研究所等研究部門の項目がこれまでの表示のみから部局別となり、各別に沿革・目的・機能等に関する説明文が載せられるようになったのは大きな変更であり、『概要』の持つ広報誌としての性格がさらに強まったものといえる。またＡ４版と大型化したことにより、写真もこれまでに最多の51枚のものが収録されている。

なお、このＡ４版・横型の『概要』は、本年（平成６）度になって、再度Ａ４版・縦型に変更された（全53頁、写真ｆ)。基本的な構成は前年度と変わらないが、横長型から縦型となり、より利用しやすいものとなっている。　（Ｏ）

沿革史紹介（3）

福岡高等学校学而寮史

1949年10月刊行。B5版。縦書き2段組。233頁。福岡高等学校学而寮寮史編纂委員会編。印刷は西日本新聞社普通印刷部。福岡高等学校内にあった寄宿舎＝学而寮の歴史が、創設前史から、同校が廃止される前年の1949年2月にわたって叙述されているが、福高自体の沿革にも多くの言及がなされている。内容は学而寮正史、思想史、先輩寄稿・寮歌集の3篇からなり、終戦直後のものとしては珍しく、口絵写真4頁（15枚）も付けられている。

本書の最も大きな特徴は、企画、原稿作成、資金調達、刊行という一連の活動が、すべて編纂委員を中心とした在校生の手によって行われたことで、A5版の単行本に換算すると500頁を越す著作が、1年4ヶ月という短期間に編集されたことには驚嘆せざるをえない。本書は廃校を目前にした福岡高等学校の生徒委員たちが、総力を挙げて作り上げた寮史であった。刊行から既に45年が経過したが、本書は旧制福高史を知る上での第一級の史料であり、その重要性は今後ますます強まるものと思われる。

あゝ玄海の浪の華―福岡高校史―

1950年3月に廃止された旧制福岡高等学校の歴史と、卒業生の歩みを一書にまとめたものである。A5版。縦書き。760頁。同校の廃止から19年、大学ではいわゆる学園紛争が頂点に達しつつあった1969年の6月に、「旧制高等学校物語シリーズ」の1冊として、財界評論新社より刊行された。タイトルの『あゝ玄海の浪の華』は、1922年に作られた福高寮歌「あゝ玄海の」の一節から採られている。編者は作道好男、江藤武人とあるが、この編集には青陵会（旧制福高同窓会）の全面的なバックアップがあった。

内容は、口絵写真集、第一部　福岡高等学校校史・寮史抄、第二部　福岡高等学校校友会史抄、第三部　福岡高等学校人物系譜から構成されている。第一部は左記の『学而寮史』等をもとに、福岡高等学校の沿革を述べたもの、第二部は総務部以下社会科学研究会にいたる校友会各部の部史を概観し、第三部には、旧制福高同窓生の社会的活動の軌跡が、経済界、政・官界、学界・教育界、弁護士・その他等に分けて記述されている。

九州大学大学史料室印刷物収集・整理・保存要項

一　趣旨

この要項は、九州大学大学史料室規則（平成四年十二月十一日施行）第二条第一号に規定する業務を円滑に進めるため、九州大学における印刷物の系統的な収集・整理・保存に関し、必要な事項を定めるものとする。

二　印刷物の送付

九州大学において教職員、学生、市民等に対し周知する目的をもって、次の一に該当する印刷物を国費により作成したときは、その一部を九州大学大学史料室に送付しなければならない。

1　年史、沿革史、略史
2　規則集
3　広報の目的で発行する定期刊行物
4　職員録、入学生名簿、学生名簿、卒業生名簿、電話番号簿
5　入学案内、学生便覧、施設等の紹介を目的とするもの
6　履修の手引、講義要項、講義題目、授業時間割表その他の修学指導のため印刷するもの
7　教育研究活動に関する報告書、研究課題一覧（学術研究論文集、紀要を除く。）
8　九州大学の各機関において将来計画その他当面する課題の周知を目的として印刷したもの

三　印刷物の整理・保存

九州大学大学史料室は、二により送付された史料を、本学の記録管理及び共同利用のため、整理し、及び保存するものとする。

四　実施

この要項は、平成六年一月二十日から実施する。

受贈図書一覧（1994年1月～6月）

東京大学史史料室ニュース　第11号
　東京大学史史料室　1993.11
九州大学医療技術短期大学部二十周年記念誌
　九州大学医療技術短期大学部創立二十周年記念事業会　1993.12
豊田高専三十年史
　豊田工業高等専門学校　1993.11
成瀬記念館　No.9
　日本女子大学成瀬記念館　1993.12
福岡県の歴史―新県庁舎竣工記念―
　福岡県　1981.10
追悼集　Ⅶ―同志社人物誌　昭和十三年～昭和十八年
　同志社社史資料室　1994．2
第一薬科大学研究年報　第24号
　第一薬科大学　1993.12
東北大学記念資料室―TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES―
　東北大学記念資料室
桃山学院年史紀要　第13号
　桃山学院年史委員会　1994．3
教室三十年の思い出
　九大医学部放射線医学教室　1960．8
九州大学看護学校三十五周年記念誌
　九州大学看護学校卒業生　1986．7
同志社時報　No.97
　学校法人同志社　1994．3
大学アーカイヴス　No.10
　東日本大学史連絡協議会　1994．3
石炭研究資料叢書　No.15
　九州大学石炭研究資料センター　1994．3
温研春秋―温研内科50周年記念随筆集―
　温研内科同門会　1982．7
温研内科五十年史
　九州大学温泉治療学研究所内科部門　1984．7
延永正教授退官記念業績集
　九州大学生体防御医学研究所臨床免疫学部門　1994．3
佛教大学の歩み
　佛教大学　1992.10
佛教大学開学80周年、通信教育部開設40周年記念誌
　佛教大学　1992.10
あゆみ―佛教大学通信教育部開設40周年記念誌―
　佛教大学通信教育部　1992.10
学院史料　第1号～第12号
　神戸女学院史料室　1983．3～1994．3
六十年のあゆみ
　学校法人帝国学園　1989.10
会員名簿　第30号
　青陵会本部　1992．4
神奈川大学史資料集　第十集　横浜専門学校会議録（一）
　学校法人神奈川大学　1994．3
同志社談叢　第十四号
　同志社社史資料室　1994．3
東海大学五十年史　通史篇
　学校法人東海大学　1993.11
東海大学五十年史　部局篇
　学校法人東海大学　1993.11
九州大学法学部同窓会名簿　1992
　九州大学法学部同窓会　1993．2
九州大学法学部卒業生名簿
　九州大学法学部同窓会　1993．3
明治大学史紀要　11号
　明治大学百年史編纂委員会　1994．3
拓殖大学創立百周年ニュース　第2号
　創立百周年記念事業事務室　1994．5
拓殖大学広報　第136号
　拓殖大学　1994．2
入学試験の制度及び試験問題の分析に基づく近代日本の学力の歴史的研究
　研究代表者稲垣忠彦　1993．3
留学システムに関する国際・比較教育学的研究―送り出しと受け入れの制度構造の分析―
　研究代表者松崎巌　1993．3
東京大学史史料室ニュース　第12号
　東京大学史史料室　1994．3
東京大学紀要　第十二号
　東京大学史史料室　1994．3
五十年記念誌
　福岡高等学校文独同窓会文集編集委員会　1993．9
興安鎮魂の譜
　竹村茂昭　1994．5
第一高等学校自治寮六十年史
　一高同窓会　1994．4
第一高等学校自治寮六十年史年表

一高同窓会　1994．4

九大女子卒業生の会会誌（松の実）　第1号～第27号

九大女子卒業生の会　1968．2～1992．9

高岡短期大学十年史

高岡短期大学　1994．3

浜松医科大学開学20周年記念誌

浜松医科大学　1994．3

大学史料室日誌抄録（1994年1月～6月）

1.13（木）　第6回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。

1.19（水）　平成6年度教官定員運用要望書提出。

1.20（木）　九州大学大学史料室印刷物収集・整理・保存要項制定。

1.27（木）　教養部より旧制福高関係史料等移管。

1.28（金）　第7回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。

1.31（月）　第9回専門委員会開催。

2.16（水）　退職者資料寄贈依頼文書発送。

2.17（木）　第8回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
第7回運営委員会開催。

3．1（火）　毎日新聞記者戦後の九州大学取材のため来室。

3.10（金）　『大学史料叢書』第2輯、『大学史料室ニュース』第3号刊行。

3.17（木）　毎日新聞記者写真撮影のため来室。

3.18（金）　第8回運営委員会開催。

3.22（火）　教官定員運用委員会開催（大学史料室運用定員決定）。

3.23（水）　『大学史料叢書』第2輯、『大学史料室ニュース』第3号発送。

3.24（木）　第9回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。

3.29（火）　平田寛文学部教授より史料寄贈。
延永正生体防御医学研究所教授より史料寄贈。

3.30（水）　東北大学百年史編纂構想委員会委員長等来室。
国武豊喜工学部長より史料寄贈。

3.31（木）　柴多一雄講師退任（長崎大学経済学部教授に転出）。

4．1（金）　折田悦郎助手、講師昇任。
概算要求事項表提出。

4．5（火）　事務補佐員採用面接（山本華子氏採用）。
平田寛文学部元教授より史料寄贈。

4．8（金）　有馬学文学部教授より史料寄贈。

4.12（火）　第9回運営委員会開催。

4.15（金）　概算要求要求書提出。

4.21（木）　第10回九州大学史料収集・保存に関する委員会開催。
平成6年度大学史料室振替要求書提出。

4.26（火）　「大学史料室への印刷物の送付について（依頼）」発送。

5．9（月）　平成7年度概算要求各部局説明聴取（有馬学委員長出席）。

5.11（水）　庶務課より史料受領。

5.12（木）　大型計算機センターシステム運用掛長写真借用のため来室。
企画調査室より史料受領。

6．2（木）　第10回運営委員会開催。

6．8（水）　九大女子卒業生の会会員写真借用のため来室。

6.17（金）　庶務課より史料受領。

九州大学大学史料室ニュース　第4号

Archives of Kyushu University

発行日　1994年9月20日（年2回刊）

編集
発行　九州大学大学史料室
福岡市東区箱崎6－10－1
電話（092）641-1101　内線 2298

印刷　九州大学印刷所